

# □ 合 唱

## 保 延 裕 史

2018年がメモリアル・イヤーの作曲家は、没後150年のジョアキーノ・ロッシーニ（1792～1868）、生誕200年のシャルル・グノー（1818～93）、生誕100年のレナード・バーンスタイン（1918～90）だった。この中で、宗教合唱曲を多く作曲したグノーでは、優美な「聖テチーリア荘厳ミサ曲」を、西本智実指揮（イルミナート合唱団、オーケストラほか、10月）で、ロッシーニの大作「スターバト・マーテル」を東京・春・音楽祭合唱の芸術シリーズVol.5としてS・スカップッチ指揮（東京オペラ・シンガーズ、東京都響ほか、4月）により演奏した。バーンスタインについては、合唱付きの交響曲第3番「カディッシュ」、および「ミサ曲」が、それぞれ2016年（E・インバル指揮東京都響ほか）、2017年（井上道義指揮、大阪フィル合唱団、大阪フィルほか）という注目の公演が記憶に新しい。

外国からの合唱団の来日は盛んで、常連のウィーン少年合唱団をはじめ、トルミスとラフマニノフの合唱曲による公演のほか、NHK響定期（P・ヤルヴィ指揮）でシベリウス「クレルヴォ交響曲」を演奏したエストニア国立男声合唱団、広汎なレパートリーでファンを増している英国の音楽グループVOCES 8、創立50周年を迎えたキングズ・シンガーズなど相次いで公演を行った。注目は12年ぶりに来日したベルリンRIAS室内合唱団で、ドイル指揮によるバッハのモテットとメンデルスゾーン、ブルックナーの合唱曲、モンテヴェルディ「聖母マリアの夕べの祈り」のほか、読響定期（鈴木雅明指揮）でメンデルスゾーンのオラトリオ「キリスト」と詩篇42篇「鹿が谷川を慕うように」を演奏し、端正で緻密なアンサンブルを聴かせた。また、トン・コープマン率いるアムステルダム・バロック合唱団・管弦楽団がバッハ「ミサ曲短調」を各地で演奏した。なお札幌公演は北海道胆振東部地震の影響で中止になったことは惜しまれる。

来日合唱団の関連で、最近の傾向として外国の合唱団が日本のオーケストラに客演するケースが増えているのは特筆すべきことだ。たとえば前述のエストニア国立男声合唱団、ベルリンRIAS室内合唱団がそうだが、それ以外にもバルダザール・ノイマン合唱団がNHK響定期（T・ヘンゲルブロック指揮）でバッハ「マニフィカト」（クリスマス用挿入曲付き）を演奏しており、こうした動きが今後さらに活発になるのか注目したい。

国内のプロ合唱団は、それぞれ特色のある活動を展開している。1956年創立の東京混声合唱団では、創立以来委嘱作品を軸とした定期演奏会、特別演奏会などの演奏会体制に、本年は新企画としてNコン・全日本合唱コンクールの課題曲を演奏するコンサートや積極的なアマチュアとの交流などの試みが行われたとともに、桂冠指揮者田中信昭、音楽監督・理事長山田和樹をはじめとする指揮者陣に、次期常任指揮者としてキハラ良尚が加わる事が発表され、新風が続々と吹き込まれた感がある。また、2009年に結成されたハルモニア・アンサンブルは、「三善見作品個展第2回1970年代」を第15回定期として代表・コンマスの福永一博が指揮、メディアへの積極的な進出と併せ、順調に歩を進めている。委嘱新作に特化し、これまでに40回の定

期を行っている西川竜太指揮ヴォクスマーナのユニークな活動も注目されてよい。一方、日本の合唱音楽の黎明期から幾多の人材を育ててきた関西では、地域に根を下ろした地道な活動を行い、現在松原千振が音楽監督を務める1989年創立の神戸市混声合唱団、公共ホール初の専属合唱団で、指揮者沼尻竜典のもと、オペラと合唱のレパートリーに機能的な活動を見せるびわ湖ホール声楽アンサンブル、ともに個性を生かした演奏への取り組みに期待が大きい。国際的な評価が著しいバッハ・コレギウム・ジャパン（合唱と管弦楽、鈴木雅明、鈴木優人指揮）は、レパートリーをより拡げて新しい魅力が加わりつつある。もうひとつ、本年は合唱を伴うオーケストラ作品上演に際して新国立劇場合唱団の出演が多かったことは注目に値する。

合唱付きのオーケストラ公演で本年取り上げられる機会が多かったのがマーラーの「千人の交響曲」だった。沼尻竜典指揮京都市響、小泉和裕指揮九州響、同じく小泉和裕指揮名古屋フィル+中部フィル、井上道義指揮読響に、それぞれ地域の合唱団などが加わっての演奏だが、それらが9月と10月に集中していたのも珍しいことだった。マーラーの交響曲でも合唱の活躍が目立つこの作品が日常的に演奏されるのは全般的にアマチュア合唱のレベル向上が為るであろう。

総じてプロとアマチュアの境界が明確でない傾向の合唱界では、近年とくにアマチュアの意識と技術がプロに拮抗している。これは合唱指導者の見識の高さと不断の努力の表れだが、そうした活動の根源に合唱フェスの存在がある。たとえば第23回を迎えたTokyo Cantat（21世紀の合唱を考える会・合唱人集団「音楽樹」が主催、栗山文昭総合プロデューサー）では、S・クラヴァ（ラトビア）、E・オルトナー（オーストリア）、G・ベタージェン（ノルウェー）の招聘講師を迎え、「第6回若い指揮者のための合唱指揮コンクール本選」、演奏会「やまとうたの血脈Ⅸ・日本語ビッグバン！近代抒情詩の開花」とクロージング・コンサートが行われ、セミナー、公開リハーサルを含め参加者と聴衆が合唱に費やす1週間となった。また、日本合唱指揮者協会が主催する北とびあ合唱フェスティバル、あるいは作曲家・合唱指揮者松下耕が総合音楽監督の軽井沢国際合唱フェスティバルなど、こうした催しの認知度の高まり、広がりを見せている。

さて、認知という点で、一般社会における合唱の受容は、現代では少なからず希薄であるのは否めない事実だ。クラシック音楽の普及が進むのと軌を一にして、プロ合唱団、アマチュア合唱団が閉鎖的体質を打破し、2つの全国規模の合唱コンクールの在り方を含め、開かれた合唱界を目指して原点に帰帰する必要がある。「ハモる」という合唱人ならではの言葉が示す基本的な歌の喜びの再認識を浸透させていくことを、ここにあって提言しておきたい。

最後に、数多くの合唱曲、童謡、歌曲で私たちに親しみある存在だった大中恩氏が12月に亡くなられた。1924年東京生れ、東京音楽学校在学中学徒出陣の経験を持ち、戦後「ろばの会」同人として子どものための歌を作曲、「サっちゃん」「犬のおまわりさん」などを世に送った。合唱曲では「愛の風船」「鳥よ」などが現在も広く歌われ、自身が指揮するコールMegを組織するなど晩年まで衰えない合唱への情熱を貫いた。もうお一方2月、バッハ研究の第一人者で合唱に造詣の深かった磯山雅氏が亡くなられた。ここに謹んで哀悼の意を表したい。